# 平塚らいてうの思想と実践

岩本明美

## 一、はじめに

ご紹介に預かりました岩本明美でございます。私はこれまでずっと男性に囲まれて仕事をしたり研究したりしてきましたので、今日は逆に女性中心なのでとても嬉しく思っております。今、一郷学長の方からご説明いただきましたように、本日は平塚らいてうについて、彼女が禅の修行をしたという事実を踏まえ、彼女が取り組んだ運動とその根底にある思想についてお話させていただきます。まず、らいてうの一生についてざっと振り返ってみたいと思いますので、ハンドアウトの年譜と書いたところをご覧ください。なお、本日はハンドアウトに沿って話を進めます。

## 二、生　涯

平塚らいてうは、一八八六年（明治十九年）に、父定二郎、母光沢（ツヤ）の三女として東京に生まれました。本名は明（ハル）といいます。らいてうはペンネームです。長女は夭折し、年子の次女は、孝（タカ）と言い、光沢とともにらいてうを支え続けました。父の定二郎は、明治政府のお役人でした。ドイツ語に堪能で、らいてうが生まれた翌年から一年半公務で欧米巡遊の旅をしています。光沢は、良家の娘で、踊りや三味線などの芸事にたけた人でした。

らいてうは、二十六歳の時に恋人と共同生活を始めるまでは裕福に暮らしましたが、らいてうの幼少期は、日本が欧化主義から国粋主義に転換した時で、生活様式の極端な変化を経験しています。定二郎が当時としては珍しく西欧諸国を見聞していますので、洋風の暮らしをしていましたが、ちょうど小学校に入る頃、古い日本の生活へ戻ってしまいました。洋服をやめて着物を着るようになります。光沢は英語の学習を続けられなくなるなど、一端西欧化したものが一気に元に戻ってしまう、そういう幼少期を過ごしています。

一八九八年には、官立の東京女子高等師範学校附属高等女学校、いわゆるお茶の水高女へ入学します。しかしそれはらいてうの本意ではありませんでした。らいてうは近代的な教育理念を持った明治女学校へ行きたかったのですが父が許しませんでした。官立の学校ですからお茶の水では良妻賢母主義教育を受けなければなりません。らいてうはそれに非常に反発を感じて、仲のよかった四人で「海賊組」を作ったりしました。その海賊組について晩年文章を残していますので、少しみてみましょう。資料をご覧ください。その当時らいてうはどんなふうに思っていたのでしょうか。

……四人がいちばんよく話し合ったことは、将来の問題でした。ただ家庭に入ることだけを目的にする生き方――それはお茶の水で叩きこまれる良妻賢母主義教育の理想とするところですが、それに対する反発から、結婚などしないで、なにかをやって身を立てることを、いつも話し合ったものでした。

やがてわたくしたちは、自分たちのグループを「海賊組」と命名しました。きちんと箱詰めにされたような学校生活への、無意識な、そして茶目気もまざった反逆ですが、わたくしたちはおさえつけられているエネルギーのはけ口を、こんなところにわ

ずかに見出したのでした。

（『金いろの自画像――平塚らいてう』「5　海賊組」）

授業で聞いた倭寇の雄大、奔放な精神に感激して海賊組を作ったようです。らいてうは、修身の授業をボイコットしたこともありましたが、頭脳明晰で成績はつねにトップでした。得意科目は数学でした。

一九〇三年にお茶の水高女を卒業し、どの大学へ進むべきか悩んでいた頃、成瀬仁蔵の創立した日本女子大学の教育理念に共鳴します。その理念とは、「女子を人として教育すること」「女子を婦人として教育すること」「女子を国民として教育すること」です。当時は良妻賢母主義教育が主流だったので、その理念は非常に新しく近代的なわけです。英語をもっと勉強したかったので日本女子大学の英文科に入学することを希望しますが、父の反対にあいます。定二郎は、その当時の一般人と同様に、「女に学問はいらない」「女が学問をしたらかえって不幸になる」という考えをもっており、大学に行くこと自体許しませんでした。しかし光沢が取り計らい、「家政科なら……」ということになり、日本女子大学の家政科へ入学しました。家政科の授業には興味をもつことはできませんでしたが、成瀬の「実践倫理」という特別な授業は非常に興奮して聞いたようです。ただそれにもやが

て幻滅します。

成瀬の話は一時的な精神の高揚をもたらしましたが、彼女の心の奥深くに届くものではなかったのです。結局これも新しい型の良妻賢母主義教育にすぎないと思うようになって、ひどく落ち込んでしまいます。ある時期に多くの人が経験することだと思いますが、らいてうは、「自己とは何か」「真理とは何か」「人はいかに生きるべきか」などについて真剣に考え始めます。今風にいえば、「自分探し」に似たような状態に陥ります。猛烈な読書欲にかられて、図書館にある本を全部読んでしまう。そのような生活になっていきます。禅の修行をするようになるのも、この頃です。それについては後ほど詳しくお話しします。

一九〇六年に日本女子大学を卒業します。自分で収入を得るために速記を習得し多少の収入はあったようですが、母にお小遣いをもらう生活が続きました。らいてうは、非常に勉強熱心で、漢文も学びたい、英語も学びたいということで、女子大卒業後は、女子英学塾（今の津田塾大学）と二松学舎に通っていました。一方、一九〇六年七月には、猛烈な修行の結果、「見性」といわれる禅の悟りを経験しています。

女子英学塾は堅苦しい大学だったようで、気に入らずに、もっと自由な学風の成美女子

英語学校に一九〇七年に移っています。そこの教師であった生田長江が「閨秀文学会」という週一回の課外講座、文学を勉強する会を主宰していて、それに参加するようになります。らいてうは、元来、文学にはあまり関心がなかったのですが、禅の悟りを得てから文学にも関心を抱くようになりました。その閨秀文学会で回覧雑誌を作ろうということになって、らいてうも『愛の末日』という小説を書きます。それを読んだ森田草平がらいてうに強く惹かれます。森田は、夏目漱石の門下生で、閨秀文学会の講師の一人でした。ちなみに、その他の講師には与謝野晶子など著名人もいました。

らいてうは、森田と交際を始めますが、二人は非常に変わった関係だったようで、森田が「死」をテーマにした本を読んでいた加減もあると思いますが、「二人で死のう」ということになり、一九〇八年三月二十一日に遺書を残して、塩原温泉の奥にある尾頭峠へ旅立ちます。しかし雪山をさまよっているところ、捜索隊に発見され、心中には至りませんでした。

この一件は、一大スキャンダルになりました。森田草平は東京帝国大学の卒業生だったので、新聞は、「帝大出の学士と女子大出の令嬢が心中未遂をした」などと書き立てました。らいてうは「禅学令嬢」と揶揄され、森田は職を失う。ですが皮肉なことに森田の方

は、漱石のすすめでこの一件を『煤煙』という小説に仕立て作家として評価されます。もっとも、らいてうは『煤煙』の内容を気に入ってはいませんが。事実と異なると言って、かなり立腹しています。ともあれ、二人には肉体関係もなく、まったく不思議な心中未遂事件です。明確な動機は、誰にも、おそらく当事者にさえわかっていないでしょう。らいてうは禅の悟りを経験した直後で、生とか死とかを超えていたところがあり、それが彼女にそういった冒険をさせたのだろうと私は思っております。実際、らいてう自身、晩年にその事件を振り返って「よくもあんなバカなことができたものだ」と言っているので、若気の至りであったことに相違ありません。

らいてうは一時スキャンダルを避けて信州に籠っていましたが、禅の修行を再開します。そして一九一一年に女性の文章に非常に関心を持っていた生田長江に、女性による女性のための雑誌を作るようにすすめられ、青鞜社を結成し『青鞜』を創刊します。一九一四年には生涯の伴侶となる奥村博史と出会います。奥村はらいてうより四歳年下で画家志望の芸術家でした。らいてうは家制度を批判していたので結婚はせず、共同生活を始めます。こうして私生活が大きく変わり、青鞜社の運営は難しくなっていきました。母が確保していたらいてうの結婚資金の一部で『青鞜』を出版していましたが、共同生活を始めた

ために財政的に一気に苦しくなりました。また、らいてうは生まれつき身体が丈夫ではなかったので、多忙から健康を著しく害してしまいます。結局『青鞜』の編集・発行権を伊藤野枝に譲ることになります。それが一九一五年です。同年十二月には長女曙生（あけみ）を出産し、翌年には長男敦史（あつぶみ）を出産します。二度の出産を経験し母性に目覚めたらいてうは、一九一八年には与謝野晶子と有名な「母性保護論争」を繰り広げます。

一九二〇年に、新しい活動に入ります。市川房枝らと共に「新婦人協会」を結成します。新婦人協会は、婦人の社会的・政治的な権利獲得を目的としていました。当時は女性には参政権はもちろんありませんし、女性が政治集会に参加することさえ禁じられていました。それを禁止していたのが治安警察法第五条ですが、その改正を協会の目標の一つにしていました。これは何年後かに実現します。しかし様々な困難かららいてうと房枝は噛み合なくなっていき、新婦人協会は、長続きせず、数年で終わっています。

一九二九年には今度は消費組合「我等の家」を設立して、らいてうは組合長に就任します。これは関東大震災の時に一瞬垣間見た「人間の協同の精神」、それを基礎にして社会を建設しようとする試みの一つです。人間には協同精神が本来的に備わっているという確

信に基づいています。「我等の家」は、戦争が拡大し日常生活も統制を受けるようになり終焉してしまいますが、十年くらい続きました。戦後は平和活動に従事します。時間の関係でこれについては省かせていただきます。らいてうの社会的実践は、以上のように青鞜運動、社会改革運動、平和運動の三つに分けることができます。本日は、青鞜運動に焦点を合わせてお話させていただきますが、まずその運動の原点にある、らいてうの禅修行について述べておきたいと思います。

## 三、禅修行

らいてうは、友達の部屋で今北洪川という禅僧の書いた『禅海一瀾』という本に触れたのをきっかけに、禅に導かれました。らいてうは、山のような本を読みあさりましたが、ピンとくるものはなかった。ところが『禅海一瀾』に書かれていた「大道（真理）は心に求めよ、外に向かって求めてはならない」（大道求于心、勿求于外……）という文句には、一瞬で「これだ」と感じるものがありました。

早速、真理を自分のなかに見出すべく日暮里の両忘庵で釋宗活老師について禅の修行を

始めます。臨済禅では公案を手がかりに修行をしますが、らいてうが最初にもらった公案は、「父母未生以前の自己本来の面目」です。つまり「自分の両親が生まれる以前の、本来の自分とはどういうものか」という問いです。これに答えなければなりませんが、公案というものは、普通に理性で考えてわかるものではありません。らいてうは、一日の大半を公案を見つめ続けるという猛烈な修行をして、半年後にようやく答えを見い出します。つまり、見性といわれる禅の悟りを体験をします。らいてうは、この体験についてこう述べています。

わたくしは生まれかわったのでした。第一の誕生は、わたくし自身は知らないわたくしの肉体の誕生でしたが、第二のこの誕生は、わたくし自身の努力による、内観を通して、意識の最下層の深みから生まれ出た真実の自分、本当の自分なのでした。

（『金いろの自画像――平塚らいてう』「6 第二の誕生」）

禅の本には、悟ると「心身脱落」すると書かれていますが、らいてうもまさにそれを体得したと述べています。もっとも、禅ではその最初の見性からさらに悟後の修行とよばれ

る長い修行をしなければなりません。らいてうもそうしたかった。しかし釋宗活老師は布教のためアメリカに行ってしまいます。「留守中他の師家につくことのないように」と宗活から戒められていましたが、押さえがたいものがあって、他の師家にも参禅しています。先ほどお話した心中未遂事件を起こしてしまうのは、そのような時期です。らいてうは、『青鞜』を刊行以降、多忙のため公案修行はできなくなりますが、一九七一年に亡くなるまで、毎日欠かすことなく自宅で坐禅を続けました。

## 四、『青鞜』創刊

次に『青鞜』についてお話します。先程お話ししたように生田長江のすすめで『青鞜』を創刊することになりますが、らいてうの関心は禅にあったので、当初はあまり乗り気ではありませんでした。しかし、姉の友人の後押しがあったお陰で、『青鞜』は誕生することになります。「青鞜」とは、「Blue Stocking」の和訳です。Bule Stocking とは、生田の説明したところによると、芸術や文学を語り合う一八世紀のイギリスのサロンで、男性に交じってそこに集まっていた女性が、普通の黒いストッキングではなく、ブルーストッキン

グを履いていたことに由来します。

さて、次が有名ならいてうの『青鞜』創刊の辞です。

元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。

今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。

私どもは隠されてしまった我が太陽を今や取り戻さねばならぬ。

（中略）

私どもは、日出ずる国の東の水晶の山の上に目映ゆる黄金の大円宮殿を営もうとするものだ。

女性よ、汝の肖像を描くに、常に金色の円天井を撰ぶことを忘れてはならぬ。

よし、私は半途にして斃るとも、よし、私は破船の水夫として海底に沈むとも、なお麻痺せる双手を挙げて「女性よ、進め、進め」と最後の息は叫ぶであろう。

（中略）

烈しく欲求することは事実を産む最も確実な真原因である。

（『金いろの自画像――平塚らいてう』「10 元始女性は太陽であった」）

これは十六頁くらいある、非常に長い難解な文章です。らいてうは、この文章ついてこう説明しています。

この文章の基調には、まずなによりも女性は人間として、個人としての自覚から出発しなければならない。女性が一個の人間として目ざめ、その自我を全的に解放する精神革命が必要であるという考えが流れております。

（『元始、女性は太陽であった』第一巻、三六二頁）

非常に高度な要求だと思いますが、らいてうの創刊の辞は、長い間抑圧されてきた女性たちの心を揺り動かし、多大な影響を与えました。

## 五、新しい女

『青鞜』（全五十二冊）が発行されたのはわずか四年半ですが、その間にも青鞜社のメンバーに対する評価には変化があります。青鞜社に、十九歳の尾竹紅吉（富本一枝）が入社してから、青鞜社のメンバーは、「新しい女」と呼ばれるようになります。「新しい女」という呼称は、どちらかと言えばポジティブな意味で普通名詞として使われていましたが、紅吉が関わった二つの事件以降は蔑称となり、青鞜社のメンバーの代名詞のようになります。

二つの事件とは「五色の酒」「吉原登楼」です。紅吉は高名な画家一族の娘で、自身も将来を嘱望される画家でした。彼女は、芸術家の集まるレストランへ広告を取りに行った折に見たフランスの五色のカクテルの美しさについて、無邪気に話しまくりました。すると「新しい女は酒を飲む」という具合に報道されてしまったのです。もう一つの「吉原登楼」も似たようなことです。紅吉の叔父が勉強のために一度遊郭を視察するようにと、お膳立てをしてくれたので、らいてう、紅吉、その他一名の青鞜社のメンバーで訪問しまし

た。実際は見学して話を聞いただけなのですが、それが「女が女を買った」などと書き立てられました。新しい女ははしたないと激しい非難にさらされ、らいてうの家には昼夜石が投げ込まれる事態となってしまいます。

そこでらいてうは、逆に自ら真に新しい女になろうと決意し、一九一三年新春に散文詩を発表します。これもらいてうの名文の一つに数えられます。

自分は新しい女である。
少なくとも真に新しい女でありたいと日々に願い、日々に努めている。
真に、しかも永遠に新しいのは太陽である。
自分は太陽である。
少なくとも太陽でありたいと日々に願い、日々に努めている。
（中略）
新しい女は「昨日」を呪っている。
新しい女はもはやしいたげられたる旧い女の歩んだ道を黙々として、はた唯々として歩むに堪えない。

新しい女は男の利己心のために無智にされ、奴隷にされ、肉塊にされた如き女の生活に満足しない。

新しい女は男の便宜のために造られた旧き道徳、法律を破壊しようと願っている。

（中略）

新しい女はただに男の利己心の上に築かれた旧道徳や法律を破壊するばかりでなく、日に日に新たな太陽の明徳をもって心霊の上に新宗教、新道徳、新法律の行われる新王国を創造しようとしている。

実に新しい女の天職は新王国の創造にある。さらば新王国とは？　新宗教とは？　新道徳とは？　新法律とは？

新しい女はいまだそれを知らない。

ただ新しい女はいまだ知られざるもののために、自己の天職のために、研究し、修養し、努力し、苦悶する。

（「新しい女」著作集第一巻、二五七―八頁）

この散文詩に明らかなように、らいてうは「新しい女」たらんとする強い意志をもっていますが、新しい女の道徳などがどうあるべきか、いまだ確固たるものをつかめていませ

ん。この知識不足を補うべく、『青鞜』は二周年を機に文芸誌から婦人問題を扱う雑誌へと転換し、恋愛、結婚、母性を中心に性道徳について議論するようになります。この頃らいてうだけでなく他の青鞜社のメンバーの中にも、恋愛、結婚、出産を経験するものが現れ、議論は机上の空論ではなく、実生活を反映したものとなりました。

ただ、こういう過渡期は、とかく思想的混乱を招くもので、一九一六年に「日陰茶屋事件」がおきてしまいます。大杉栄という名の知れた社会主義者が、東京郊外にある日陰茶屋で元青鞜社のメンバーの神近市子に刺されたのです。『都新聞』（一九一六年十一月十日）は、こう報じました。

社会主義者の大杉栄が　新しい女神近市子に斬られた　短刀で咽喉を刺し瀕死の重傷を負わす。

大杉は、妻帯者でしたが、神近、さらに伊藤野枝とも関係をもち、彼独自の自由恋愛論を提唱していました。それは、互いに経済的に依存しない、同居しない、性的関係も含め相手の自由を妨げない、という三条件からなるものでした。にもかかわらず、大杉が野枝と

暮らし始めたため、神近は激怒したわけです。大杉の怪我は実際には大したことはなかったのですが、神近は二年間服役しています。一方、野枝は大杉のもとへ走ったことによって、夫を捨てただけでなく、『青鞜』をも葬ることになりました。『青鞜』は、一九一六年二月（第六巻第二号）をもって、無期休刊となりました。らいてうはこの日陰茶屋事件を『青鞜』のエピローグだと言っていますが、確かにこの事件によって「新しい女」も『青鞜』も終焉を迎えたのです。

## 六、青鞜運動とは

青鞜運動とは、何だったのでしょうか。その意義は、因習を打破したこと、婦人（女性）問題を顕在化させたことといえるでしょう。現代なら恋愛や結婚についての議論などは日常的に行われていますが、当時は大変困難なことでした。いかに困難であったかは、次のらいてうの文章が発禁処分の対象になったことでおよそ想像がつくでしょう。

何故世の多くの婦人たちには女は一度は必ず結婚すべきものだということに、結婚

が女の唯一の生きる道だということに、総ての女は良妻たり、賢母たるべきものだということにこれが女の生活の総てであるということにもっと根本的な疑問が起こってこないのでしょう。私は不思議に思います。長い過去の歴史や、多くの慣習や、目前の功利や、便宜や、殊に男性の生活の利便のために成立した在来の女徳などから全然離れて、本来女性たるものの真の生活はいかにあるべきかについてもっと根本的な考察を試みようともしないのでしょう。

これは、「世の婦人たちへ」（著作集第一巻、二一七頁、一九一三年）という評論からの引用ですが、この評論を含む、らいてうの処女評論集『円窓』は、発禁処分になりました。「家族制度破壊」「風俗壊乱」がその理由でした。当時の日本は、まだそんな状態だったんですね。因習を打破するのは、実際容易なことではありませんでした。青鞜社のメンバーで、因習にとらわれない新しい生き方をしようとしたものの、上手く生きることができず、自ら命を絶ってしまった女性、長生きできなかった女性は、数人ではありません。もっともらいてうは、そのような者たちについてこう述べています。

しかし、一見敗残者のようなこの人たちを、わたくしは不幸であったとも、気の毒な犠牲者だとも思っていません。みなそれなりに自分自身を生き、自分のもっている力のありたけを試しえたことに、生き甲斐を感じていたに相違ないと思うからです。

外観の成功と失敗にかかわりなく、婦人の新しい生活の探求に、その開拓に、彼女たちの一生はそれぞれに意味があったので、後につづく者を思うとき、どんな苦しみのなかでも、幸福感はあったと思います。

（「自我の確立へのたたかい」著作集第七巻、四二四―五頁、一九六五年）

では、青鞜運動の目指したものは、その後実現したのでしょうか。戦後参政権を獲得するなど女性は社会的に一気に解放されましたが、らいてうは、一九四九年に発表した「このごろの婦人の傾向について――婦人解放と婦人の自我の解放」著作集第七巻、七〇―七四頁）でこう述べています。

……いわゆる婦人解放は婦人の自我を解放するものではないのです。だから自由を得たように思っただけで、自分自身の心の不自由さには少しも変りはないのです。

婦人解放と婦人の自我の解放――この二つのことが、これまでもよく混同されてきましたが、これは全然違った方向にむかうもので、一つは外へ、一つは内への正反対の運動です。しかしそのどちらを欠いてもそこに完全な人間の自由は得られないのです。二つは同時に併行し、また表裏となっていかねばならないと思います。民主主義によって急激に解放された婦人たちのこの社会的関心も、同時に、各自の自我への関心を強くよびさまさなければ、あやういでありましょう。――自我の解放こそ自由の根源を発見することだからです。

（中略）

……青鞜運動は、今日、ある程度実現されているような婦人解放のための運動ではなかったのです。それはむしろ婦人の自我解放運動として出発したものなのでありました。だから最初はむろん純然たる精神運動でありました。ここから出発して社会的に進出することは考えられていましたけれど。ところが戦後解放された婦人たちの傾向は、これとは正反対の方向のものであります。そしてこの二つの方向は容易に一つに出会いそうもありません。――ここに、わたくしの不満のあることを知っていただきたいのです。

青鞜運動とは自我を解放する精神運動でした。しかし戦後解放された女性たちは、その運動が目指したものとは正反対の方向にのみ進んでしまったのです。そのためでしょう、らいてうは一九四七年には、『青鞜』創刊の辞と基調を同じくする、つまり自我の解放を促す「あなた自身を知れ」を書いています。

若き友よ、あなたは、あなた自身をご存じですか。

あなたは何でしょう。こう申しますとなんだかおかしな問いを、突然だすものだとへんにお思いになるかもしれません。

しかし、自分自身を知るということは、人間にとって何より大切な一大事で、あなたのほんとうの生活の根となり、また出発点となることなのです。

わたくしの若き友よ、あなたはまずあなたご自身を知って下さい。

（『金いろの自画像――平塚らいてう』「51 あなた自身を知る」）

『真實心』第三十四集 平成24年度2013年3月発行（京都光華女子大学）



## 七、恋愛から母性主義へ

らいてうが「本来の自己」を知ることを婦人（人間）解放の出発点と見なしていることは終世一貫しています。ただ、恋愛と出産を経験することによって、葛藤のすえ新たな境地に到達します。仏教的に言えば、見性によって得た自利の立場から、他人を益する立場（他愛主義）へと発展します。らいてうの思想と実践を考える上でこの点はとても重要なので、最後にそれをらいてうの言葉を拾いながら確認しておきたいと思います。

……自己の主張であり、発展であった恋愛は、実は人生の一面である他愛的生活に通ずる一つの門戸であったのです。やがて私の前にはO氏に対する自分によって、次に子どもに対する自分によって他愛主義の天地が自然と開展してきました。（中略）この矛盾もやはり私をもっと広い、もっと大きいもっと深い生活に導いてくれる一つの門なのだろうと思っています。

（「母としての一年間」著作集第二巻、二七四―二七五頁、一九一七年）

ここにいう「矛盾」の意味するところは、以下に明らかです。

……今後の私の生活は分裂の苦痛を経験せずにはすまないでしょう。私の魂と私のもち得る限りの時間と精力とは自分の教養と、仕事と、生活のための職業と愛人と、子供と、家庭との上にどのようにか分け与えられていかねばならないことでしょう。そして私は私にとって欠くべからざる第一要件である精神集注を今後はいっそう乱されもし、減じさせられもしていくことでしょう。（「個人としての生活と性としての生活との間の争闘について」著作集第二巻、五二頁、一九一五年）

上の二つの引用から、精神集注（坐禅）を日々欠かさず、知的好奇心旺盛ならいてうが、奥村と子供と暮らすことによって、自身の個人生活が著しく損なわれるのをおそれながらも、以前よりも一層広い境地へと導かれていく状況が理解できると思います。重要なことは、こうして他愛主義に目覚めると共に、今後なすべき社会的仕事もまた把握されたことです。

私は人間としての、または個性あるものとしての婦人を解放するのみならず、女性として婦人を解放せねばならぬという問題が自分の前にまだ手も触れられずに残されていたということに今さらのごとく気づき始めたのでした。（同右、四〇―四一頁）

現代では以前は婦人といったところを女性ということが多いため混乱するかも知れませんが、ここにいう女性とは、「産む性」あるいは「女」と置き換えれば理解しやすいでしょう。では「女性として婦人を解放」するとは、どういうことでしょうか。

本当の婦人解放は、婦人の家庭生活と職業生活との調和において見出されるべきもので、これは二つの生活を両立せしめうるところの社会制度の中に求めるよりほかありません。すなわち私が夢想する社会においては、すべての婦人が労働の自由を得て、男子と同様にあらゆる方面の社会的任務に従事しうるとともに、家庭における母の仕事もまた他の男女の仕事と同様（否、それ以上にさえ）重要な社会的任務であって、それによって、収入はむろん、社会的地位と一個の人間としての権利をも与えられるのでなければなりません。

（『金いろの自画像――平塚らいてう』「26 家庭と職業の両立」）

女性としての婦人解放とは、平たくいうなら、妊娠・出産・育児のために仕事ができない期間は、母としての仕事の重大な価値を認めて、国家が母子を保護せよというものです。ちなみに与謝野晶子と繰り広げた「母性保護論争」は、晶子がらいてうの考えを「依頼主義」だと非難したことに始まります。その論争の詳細について今述べることはできませんので、興味のある方は、二人の論争に折り合いをつけた山川菊栄という思想家の「母性保護と経済的独立――与謝野・平塚二氏の論争――」（『山川菊栄評論集』岩波文庫）という名論文をご覧下さい。

## 八、おわりに

以上、本日は、主にらいてうの初期の思想と実践についてお話させていただきましたが、発表者の不手際もあり、それさえ十分お伝えすることができませんでした。不足は、ハンドアウトに示しました参考資料で補っていただけたらと考えますので、それにざっと

目を通して終わりにしたいと思います。

「著作集」は、刊行されているのは、ここに挙げました、大月書店のものだけです。全集ではないので、らいてうの著述をすべて網羅しているわけではありませんが、重要なものは殆ど含まれています。

「自伝」は、二種類あります。日本図書センターの『平塚らいてう』は、らいてう自身が生前に書いたものですが、元来自伝を意図したものではなく、新婦人協会解散後から戦後までは空白になっています。もう一つの自伝『元始、女性は太陽であった』は、らいてう没後に刊行されました。小林登美枝がらいてうの著述やらいてうへのインタビューに基づいて編集したものです。

平塚らいてうについての概説書としては、小林登美枝の『平塚らいてう』（新書）がお薦めですが、古本でしか手に入らないと思います。昨年刊行されたらいてうの孫の奥村直史の『平塚らいてう――孫が語る素顔』も概説書といえるものです。この人は心理療法士で、らいてうを精神分析するような視点で書かれているところが興味深いです。一方、らいてうの息子の奥村敦史も、写真集『わたくしは永遠に失望しない』を昨年上梓しました。新出の写真を盛り込み、さらに従来の誤りを正したらいてうの年譜や著作目録も含ま

れています。

『青鞜』に関して良書だと思うのは、堀場清子の『青鞜の時代―平塚らいてうと新しい女たち』です。彼女は詩人ですが、非常に丹念に調べてまとめています。『「青鞜」を学ぶ人のために』という編書も、『青鞜』について研究するならば、とても役に立つでしょう。「らいてう研究会」が編集した、『「青鞜」人物事典――１１０人の群像』は、人物の写真を載せて簡潔に説明されており、楽しく読めるはずです。『金いろの自画像』は、らいてうの著述のうち六十カ所から言葉を拾い出し、解説しています。

ウェッブサイトでは、「平塚らいてうの家」のホームページが、らいてうに関する基本情報を整理しています。ちなみにこの「平塚らいてうの家」を今年の九月に訪問しました。長野県上田駅から車で四十五分くらい登ったあずまや高原にあります。小さな家ですが、自然環境は抜群で、とても気持ちのよい所でした。ここでしか閲覧できない、らいてうの関連資料もたくさんあります。

次に視聴覚資料ですが、らいてうの記録映画が二〇〇一年に作られています。一四〇分と長いものです。らいてうの画像はほとんど出てきませんが、入念に制作されており、時代背景も合わせて紹介しています。もう一つの『華の乱』は、史実には基づいていません

し、らいてうは登場せず与謝野晶子に焦点をあわせたものですけれども、大正デモクラシーの雰囲気が良く表れています。小説を映画化したものなので娯楽性があり、面白く鑑賞できます。吉永小百合が与謝野晶子を演じています。大杉栄と伊藤野枝も登場します。

平塚らいてうは、心中未遂事件のあと、一九〇八年に日本女子大学の同窓会「桜楓会」を除名されましたが、一九九二年に復権しています。八十四年後のことです。また「平塚らいてう賞」が彼女の日本女子大学卒業百年を記念して二〇〇五年に創設されました。平塚らいてうに関するすぐれた論文に賞金を授与する制度です。らいてう自身、青鞜運動が正しく評価されるには時間がかかるだろうと述べていますが、まさにそれにはほぼ一世紀かかったということです。彼女の思想は普遍性をもっているので、機会があれば、ぜひ彼女の著作をひもといてみて下さい。

以上、まとまりのない話になってしまいましたが、これで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

――二〇一二年一二月七日――

＊　本稿は、当日の講演内容を加筆訂正したものである。

## 参考資料

【著作集】
『平塚らいてう著作集』（七巻＋補＝全八巻）大月書店、一九八四
【自伝】『平塚らいてう』（作家の自伝８）日本図書センター、一九九四
『元始、女性は太陽であった』（全四冊）大月書店、国民文庫、一九九二
【概説・研究書】
小林登美枝『平塚らいてう』（センチュリーブックス　人と思想71）清水書院、一九八三
奥村直史『平塚らいてう――孫が語る素顔』平凡社新書六〇二、二〇一一
奥村敦史編『わたくしは永遠に失望しない――写真集平塚らいてう・人と生涯』ドメス出版、二〇一一
堀場清子『青鞜の時代――平塚らいてうと新しい女たち』岩波新書、一九八八
米田佐代子・池田恵美子篇『『青鞜』を学ぶ人のために』世界思想社、一九九九
らいてう研究会編『『青鞜』人物事典――１１０人の群像』大修館書店、二〇〇一
米田佐代子編『金いろの自画像――平塚らいてう　ことばの花束』大月書店、二〇〇五
【関連ウェッブサイト】「平塚らいてうの家」
［http://homepage3.nifty.com/raichou/house/raichounoie.html］
【視聴覚資料】記録映画「平塚らいてうの生涯――元始、女性は太陽であった」羽田澄子監督、二〇〇一年、一四〇分
「華の乱」深作欣二監督、一九八八年